日本人に天地創造の神を紹介する

2010 年 4 月 25 日

西九州伝道所

佐々木正明

人の心は複雑で、なかなか理解できるものではありません。自分の心さえ、ときどき分からなくなるのに、どうして他人（ひと）の心を知ることができるでしょう。特に日本人の宗教意識となると、とても複雑な上に曖昧もことしていて、簡単に把握したり、説明できたりするものではありません。

たとえば、現代日本人のほとんどは無神論者です。ところが一方では、その日本人の多くが年に数回は神社仏閣に詣でる、信仰心の篤い人々です。日本人の宗教意識には、非常に大きな矛盾があり、まさに混沌としているのです。この小文はそのような日本人の宗教意識の矛盾と混迷の原因を探ると同時に、いかにすれば彼らに天地創造の神を紹介し、救いに導くことが出来るかを考えるものです。曖昧な神意識しか持ち合わせていない日本人に、しっかりとした天地創造の神の意識を持たせることができたら、伝道は 95 パーセント成功したとさえ言われるからです。

１．　頭の理解と心の感覚

日本ほど唯物論が広くまた深く浸透している国はないといわれます。唯物共産主義を国是としていた国々にも、これほど唯物論が人心を掌握したものはありません。ソ連も中国も、その他の旧共産主義諸国の多くも、あらゆる機会を用いて唯物論による洗脳を行いました。ところが体制が崩れると、宗教が猛烈な勢いで盛り返してきたことは誰もが認める事実です。日本では、そのような体制的な唯物論教育こそ行われませんでしたが、国家と宗教の分離が強く推し進められました。その結果、国家の教育機関と宗教の分離が当然のものとして行われてきたのです。子どもたちはできるかぎり、あらゆる宗教的な背景を取り除いた無宗教的雰囲気、宗教的真空状態とも言うべき唯物論と進化論の感覚の中で、教育をされてきたのです。そのために日本人は、子どもの頃から非常に強い無神論的世界観を身につけてしまいました。彼らは唯物論者ではありません。唯物論などという哲学的な論を学んだわけではないのです。むしろ、科学至上主義の学校教育がもたらしたものでしょうか。とにかく、徹底して唯物論的で無宗教なのです。そういうわけで、ふつうの日本人の頭、すなわち学問的な感覚では、神などというものは存在し得ないのです。

ところが一方、日本人は非常に宗教的です。宗教人口は国民総人口の約二倍になると言われています。地域社会には必ず神がいます。産土神や氏神がいて、鎮守の森があります。社があり祠があり大きな有名な神社もそこここにあります。大都会になると地域の宗教行事は比較的少なくなり、宗教感覚も希薄になると言われていますが、それでも、観光事業と一体になった様々な祭りが盛大に行われ、神々が祀られています。家族や親族は、仏教行事という絆で固く結ばれ、そこでアイデンティフィケーション、つまり自分が誰であるかという確認が行われて、精神の安定に役立っています。神の存在を否定し、神はいないと言ってはばからない人間が、何かにつけて神社に詣で寺にお参りをするのです。この事実は、日本人も他の国の人々と変わらず、非常に宗教的だということを証明するものです。頭では神の存在を否定しても、心では神、あるいは神に相当するものの存在を信じているのです。頭の理解と心の感覚が相反しているのです。

これは、人間が神に似せられ、霊的な存在として造られているという、聖書の記述と調和するものです。(創世記 1:2７-2８）人間は霊である神に似せて造られた霊的な動物であるために、神を感じ、神を知り、神を礼拝し、神と交わり、神に祈るのです。頭がどれほど神を否定しても、心は神を求め続けるのです。ちょうど、人間は人間同士の交わりがないと孤独に陥り、正常な精神状態では居られなくなるように、神との交わりがないと、たとえどのような生活をしていても心が満たされず、人間としての本来の生き方ができず、人間らしい充足感も持てないのです。霊的な存在である人間の心には、神との交わりによってのみ満たされる部分があるからです。そのために、人間は人種と言語と文化と時代を超えて、常に神を求め、礼拝しようとしてきました。日本人も、決して例外ではないのです。したがって、理屈で神を否定しながら心で神を信じている日本人には、合理主義の洗礼を受けた西欧プロテスタント型の理屈っぽい伝道ではなく、霊的感覚や心を大切にした伝道をすべきです。特別な場合を除いては、神の存在を哲学的に論じたりするのではなく、すでに神の存在を前提にしている感覚、心を大切にしてそこに訴える話をすべきです。

ただ人間は、罪のために神から隔離されたままに生き、社会を築き、文化を作り上げてきたために、(創世記 3:23) 神についてはほとんど何も分からなくなってしまいました。心にある神の感覚、おぼろげな神の姿を具体的に表現すると、多くの場合、多神論に陥り、何もかも神に仕立て上げることになってしまうわけです。その結果、合理主義、自然科学主義の教育を受けてきた日本人は、「神なんてばかばかしくて、とても信じるには足りない」と、無神論者なってしまったのです。山の神、海の神、太陽の神などはまだましなほうで、鰐の神、蛇の神、牛の神、鼠の神、蛙の神となってくると、もうお話にもなりません。

ところで無神論的日本人は、ときどき海外の旅行先で悶着を起こしています。ホテルなどで客が書き込む用紙の宗教欄に、無宗教と記入してしまうからです。多くの国々では、良しにつけ悪しきにつけ、日常生活の中で宗教が非常に大切にあつかわれていることを、

知らなければなりません。宗教によって、たとえば、食べ物に対するタブーが異なります。それで、ホテルでは宗教欄を重要視するのです。豚は絶対に食べない宗教、牛は絶対口にしない信仰と、非常に厳しくうるさいのです。日本人は好き嫌いで選ぶだけですが、海老や蟹は断じて避ける教えもあります。そのために、無宗教と記入すると、問題は、その人の信用がまったく失墜してしまうことです。多くの文化では、神を信じない人間は信用の置けない人間なのです。でも、無宗教と書き込むような「知的な日本人」でさえ、信仰心を完全に否定するのではありません。頭では神の存在を否定している自分もまた、心では本能的に神を信じようとしていることに気付いていて、宗教を大切なものと考えているのです。

２．　見えないお方に対する崇高な思いと、見える神々に対する嘲笑

日本人の多くは、宗教を排除する学校教育などの影響により、かなり唯物論に近い考え方をしています。そのために、理屈の上では神の存在さえ否定します。とは言え、心の中では神を感じているのです。ただ、この神の概念が非常に曖昧なのです。その曖昧さを大きく二つに分けることが出来ます。一つは目に見えないお方に対する畏れと感謝であり、もう一つは目に見える神々というか、多神論的な神々に対する軽蔑と嘲笑です。

日本人が心の奥で感じているお方は、目に見えない大きなお方です。ただし、これはあくまでもとても曖昧な感覚であって、まったく理論的裏付けのないものです。日本人は昔から、この曖昧ながらも確かに感じているお方を畏れ、敬い、感謝し、崇め、歌い、祀ってきました。日本人の心の中で、このお方は日本の国土を豊かに恵み、守り、祝福し、緑を茂らせ、清らかな川を流れさせ、作物を稔らせ、家畜を育て、魚を増やし、四季をめぐらせ、太陽と雨と風をもって、日本人を喜ばせて来たお方なのです。理解するとか知るとかいうより、まさにほのかに、おおらかに感じてきたお方です。このような感覚は、西行法師によって詠われた「なにごとのおわしますかはしらねども　かたじけなさになみだこぼるる」という歌に、もっともよく表現されていると言われます。

このよくわからないお方、目に見えないお方はふつう神とさえ呼ばれず、神よりもさらに高く深遠な存在として感じられているのです。伊勢神宮にお参りをしてこの歌を詠んだとき、西行はすでに仏教に帰依していたのですから、神という言葉を使うのをはばかったのかとも思われますが、むしろ、自分が感じていた大きなお方を「神」という小さな言葉で表現するのを嫌ったのかもしれません。彼の心にあったのは間違いなく、日本人の心に宿り続けてきた大きなお方の概念です。古来、日本人が崇めてきた尊く気高いお方は、あらゆる神々と呼ばれるものの背後におられる、さらに大きなお方なのです。神社やお宮に祀られた神々とは違って、由来も謂れも起こりも歴史も名前さえもない、はるかに高くはるかに大きなお方です。自然を支配し、山や川や海や湖を与え、作物を稔らせ、動物を増やし、日本を支えておられるお方です。そして、あくまでも優しく、人を慈しみ、人にいのちを与え、喜びを与えていてくださるお方です。

西行にかぎらず、大多数の日本人にとって神々とは、この大きく高いお方より小さく低いレベルの存在に過ぎないのです。日本人が祈るとき、非常におぼろげで曖昧ながらも感じているのは、目の前の神社や祠に祀られている神々ではなく、その背後におられるもっと大きく気高いお方、神と呼んで良いのかどうかさえ分からないほど、尊く高貴なお方なのです。日本人は、このお方を神と呼ぶことに、たとえわずかでも躊躇を感じるのです。

日本人にとって神はあまりにも安っぽいからです。もともと神という言葉は、上の方向を示す「かみ」という意味で、単に少しばかり上だということに過ぎず、釣りの上手な人は釣りの神様になり、料理の上手な人は料理の神様になり、野球の上手な人は野球の神様になる程度なのです。日本人が心で尊び感謝を捧げてきたお方はそのような神々とは異なり、四季を支配し、山や海を治め、豊かな実りを与え、人間を喜ばせ、守り、支えて来られた、たぶんただお一人の、心が広く懐の深いお方なのです。

ためしに、自分がクリスチャンでなかったときの感覚を思い出して欲しいものです。あるいは、いまいろいろな神社に詣でている、多くの人々に尋ねてみるとよいでしょう。日本人は実にいろいろな神社を訪れ、様々な神々にお祈りします。良く知られている神社にはすべて由来と謂れがあり、祀られている神々には名があります。でもそれらの神社に詣でる日本人は、そのようなことにいちいち頓着しません。名前が何であれ、謂れがどうであったとしても、それらはあくまでも表面的なもの、何かの理由でそこに現れた姿、権化に過ぎず、その背後には同じ大きなお方、目に見えない大きなお方、昔から日本を祝福し守ってきたかしこいお方がおられると感じ、そのお方に向かって礼拝（らいはい）をするのです。

深山に分け入り、小さな社や祠をおとずれ、注連縄の張られた木や岩に向かって祈るときも同じです。目の前のものが何であれ、祈っている対象は目に見えない大きなお方なのです。不思議な形をした岩、年老いた巨木、そして幽玄な気配などに目に見えないお方を感じ、注連縄を張るのです。訪れ祈る人たちは、祀られている神々の名や謂れをいちいち尋ねません。安産の神だと言われれば安産のために祈り、豊漁の神だと言われれば豊漁のために祈り、学問の神だといわれれば受験のために祈り、縁結びの神だと言われれば、良い結婚相手が見つかるように祈ります。たしかに祈りはするのですが、それはおみくじを買うような軽い気持ちの祈りだったり、単なる自分の願いの表現だったりで、ほとんどの場合、安産専門の神がいるとも、豊漁に専念している神がいるとも思っていません。ましてや、縁結びをするだけの神がいるとも、毎年何百万人もの受験生のため駆けずり回って、汗を流してくれる神がいるとも信じていません。それらの神々の背後に、大きなお方がいらっしゃると感じて祈願しえいるのです。

　このように日本人は、たとえ霞の中で見るように曖昧ではあっても、心の奥底に、非常に崇高な神意識を持っています。ところがその一方で、何でも神にしてしまう愚かな一面も持ち合わせているわけです。崇高なお方、真の神についての概念がおぼろげで、理論的でもなく、むしろ感覚的なものであるために、はたして、このお方は誰なのか、具体的にどのようなお方なのかと問われると、なんとも答えられなくなってしまいます。そこで人間は、曖昧な意識のままでは満足できずに、何とかこのお方を具体的に知り、おぼろげな姿を明瞭にしたと願います。自分を創造してくださった神と交わりたいという、人間本来の願望のあらわれです。そこで人間の思考は、「何々のような・・・」という行程を辿ることになります。具体的に目で見ることができ、手で触れることができ、良く知っているものから辿って、抽象的であまり知られていないものを想像して理解するやり方です。このお方は優しいお方であるというよりも、母親のように優しいお方だと言ったほうが理解しやすいのです。このお方は強い方だというより、風や雷のように強い方だと表現した方が分かりやすいのです。

　そのような思考過程を通って、おぼろげな神概念の一部を具体的な形に表現したものが、そこここに作られている小さな神々です。当初は大きなお方のある一面、ごく一部を表現したものだったのかも知れませんが、表現されたものはすぐにも一人歩きしだして、一つの神とされてしまいました。それらがやたらにたくさん出来て、なんでも神とされ、ついには八百万の神々に発展したのでしょう。古事記や日本書紀をはじめとする、いろいろな古典に記されている神代の物語は、そのような神々のオンパレードです。もっとも親しみやすく擬人化された神々、あるいは自然現象化された神々が次々と際限なく登場して、まさに人間臭い、おどろおどろとした物語が展開されて行きます。

　そこには、人間の意識の中にある大きく豊かで高潔なお方の姿を、何とか具体的に表現しようとする努力は見て取れますが、かえって人間の想像力の限界が記されているとも言えます。最初に生まれたアメノミナカヌシと呼ばれる神は（天御中主神）、天地の創造に関わる神らしく、後代になって国学者の平田篤胤などにより、キリスト教の神と同様の創造神に位置づけられています。ただこの神は、神話の最初に一度登場するだけで、すぐに姿を隠してしまい、その後の神々にも人間にも関わりを持たない神です。あくまでも人間を愛し続けておられる、聖書に啓示された神とはまったく異なっています。イザナギの命とイザナミの命は良く知られた夫婦の神ですが、彼らが関わったとされる、日本列島の成り立ちの物語もあまりにも幼稚で、逆に、天地創造という聖書に記された壮大な出来事が、いかに人間の想像力を超えていたかということを示すものです。神々と呼ばれるものは、良くは分からないけれど日本人が心の奥深くで感じていた、大きく豊かで力強いお方を何とか表現しようとした、努力の結果です。ところが実際には、表現された神々は心の中に感じているお方とは似ても似つかないものとなり、理性的な頭脳にはたちまち軽蔑され、嘲笑の的となってしまったわけです。

　もともと古事記や日本書紀は天皇が神の直系であることを示し、その地位を固めるために、ちまたで言い伝えられてきた神話を集めて、無理やりに創作された物語です。当時、

非常な勢いで拡大していた仏教勢力に対抗する意図もあったのでしょう。とにかくそこに記されている物語は、日本人の心の中にあった崇高な神意識とは似ても似つかない、おどろおどろとした神々の世界です。心の奥底に潜む良く分からないお方、目に見えない崇高なお方の姿を具体的に表現しようとすると、たちまち、このような愚にもつかない多神教に陥ってしまうのです。人間や畜生たちよりも醜く描き出された、あまりにも荒唐無稽な神々の姿を、多くの日本人は迷信と言って嘲笑し、無神論者であると自称することになったのでしょう。それでいながら大多数の日本人は、「なにごとのおわしますはしらねどもかたじけなさになみだこぼるる」という感覚を大切にし、宗教意識そのものを嘲笑するようなことはないのです。

ところで面白いことに、神道には偶像がないという特徴があります。わずかの例外はあったとしても、ありとあらゆるものを神としながら、その神の姿を刻むことはしなかったのです。これは、本来の神、つまり、日本人が畏れ敬い礼拝してきたお方は、あくまでも目に見えない崇高な方であるという、強い感覚があったからだと言えるでしょう。偶像という目に見ることができ、手で触れることができる神々を嘲笑しているのです。ここに、まばゆい偶像をもって入ってきた、仏教の感覚との違いがあります。日本人は、一方では目に見えるすべてのものを神々としながら、それらは自分たちが本能的に感じ、尊び、崇め、感謝を捧げてきたお方ではないという、非常に強い感覚を持ちあわせているのです。後代になって神道が仏教と混合していく中で、多くの日本の神々は、仏がそのような姿をとって現れてくださったものだと説明され、たとえわずかであっても、神道の偶像さえも出現したのは事実です。それでも大多数の日本人は、そのような仏神を自分たちの心に感じてきた尊く崇高なお方、真の神とは考えず、「使い走りの神」程度に見ていたのです。カトリックで言う、天使だとか守護聖人の役割です。

そういうわけで日本人の古来の感覚、よくは分からないと言いながら、目に見えない崇高で唯一の方を拝む感覚を大切にし、そこに訴えかけながら天地創造の神を紹介するのが、日本人に対する賢い伝道の方法であると思うのです。くり返しますが、日本人の神意識では、よくはわからないけれども本能的に感じてきた崇高な方と、その本能的神意識を具体的に見える形や物語に表現しようとした神々の間に、非常に大きな隔たりがあります。たとえ自分たちは考えても見なかったことであり、意識さえもしていなかったことかもしれませんが、日本人は心で感じる大きなお方と、そこここに祭られている神々を区別していたのです。目に見える形や物語に表現された神々は、手っ取り早い信仰の対象にされ、いろいろな名前や謂れや役割が与えられて、あるものは大きな神社に仰々しく祀られ、あるものは木陰や岩陰の祠や社にひっそりと祀られて来たのですが、反面、それを拝んでいる人々でさえ愚かしいとさげすむ存在なのです。

ですから、私たちが日本人に伝道するときには、表面的に通俗信仰の対象となっている神々、名前がつけられ神社に祀られている神々と、それらを拝んでいる人々が、理解を超えた存在として本能的に感じている、大きなお方との違いをはっきりさせてお話しすることが大切です。日本人自身がこのことに気付かずに来たのですが、日本人が真に礼拝しよ

うとしている神は、有名な大社に祀られている神々でも、祠や社にひっそりと祭られている神々でもなく、自分の心で本能的に感じている、目に見えなく、大きく、豊かで、哀れみに富み、恵みにあふれたお方なのだと、気付かせてあげることがとても重要なのです。

目に見えるところは、変わった形をした木の根であろうと、岩のでっぱりであろうと、あるいは大神殿に祀られた歴史上の人物だろうと、それらはあくまでも通俗的な礼拝の表現にすぎません。日本人が本当に慕い求め、礼拝しようとしているのは、それらの目に見える対象ではなく、それらの背後におられるもっと大きな方、もっと力ある方、もっと尊いかた、天と地をお造りになり、昔からずっと日本にいて日本を祝福してくださっている、大きな神だということを教えてあげれば良いのです。それに納得できたとき日本人は、聖書にご自分を啓示された万物の創造者である神を、受け入れることが出来るはずです。

３．　すべての物に内在する神

日本人はまた、すべての物に神の姿を見てきました。それも多神教といわれる信仰形態に関係があるでしょう。多くの日本人が、あらゆる物の中に神性が宿ると考え、すべての物は神だと言うのです。いわゆる汎神論です。これは、無神論の立場からは嘲笑の的であり、進化論から言うと未発達な宗教観にすぎません。

少々卑近な例になりますが、沖縄には珍々洞という良く知られた大きな鍾乳洞があります。何がそれほど珍しいのかというと、鍾乳洞の天井からぶら下がる鍾乳石の一つが、洞を吹き抜ける風のいたずらで、まさに男根にそっくりな形になっているのです。それでこの石は、子宝を望む多くの女性の礼拝の対象になったというわけです。このような自然の作り出す形態に神秘性を感じ、その中に神の宿りを信じて偶像化する例は、世界中で枚挙に暇がありません。ただしこの珍々洞の奇岩は、まだ完全に偶像化されているのではありません。むしろ、汎神論的な感覚で、そこに神が宿っていると感じて・・・多分、考えてではなく・・・・その形の背後に存在すると思われるものに、祈願をするのでしょう。

また現代日本人の 70 パーセント以上が、妖怪とか化け物といわれる神道的感覚の存在や、幽霊だとか背後霊とか色々な名前で呼ばれる、仏教的感覚の存在をみとめています。さらに、そこに陰陽道までも加わって、かなり複雑でまた曖昧な霊的世界の存在がまじめに語られています。それでいながら、唯物論的感覚で受けた教育のために、知的な会話ではそれらを全面的に否定するのです。大多数の日本人にとって、これらの存在は祈りや礼拝の対象にはなりませんが、人間世界に幸いをもたらしたり災いをもたらすものとして、あるときは御払いで追い払われたり、慰撫工作で鎮められたりするのです。

啓蒙思想の影響を受けたふつうのキリスト教に言わせると、これは愚かな人間の迷いの産物にすぎません。しかし、聖書の記述から考えると必ずしもそうではありません。万物は神によって創造されました。万物の中には紛れもなく神の性質が、あるいは神の性格が反映されているからです。ちょうど、筆者の雑文には筆者の粗雑な性格が反映していて、誰にでも「これは彼が書いたものだ」とわかるようなものです。汎神論にはおろかな迷いと言い切れないところがあるのです。

聖書によると、すべての物を創造された神は、すべての物の上にあり、すべての物を貫き、すべての物の中におられるのです。（エペソ４：６） 岩の中にも木の中にも水の中にも、天にも地にも地の底の地核の中にも、さらにはいま私たちが生活しているこの次元を超えた、別の次元にも神はおられるのです。神が万物を創造されたとき、私たちが犬小屋を作るときのようにお造りになったのではありません。私たちは私たちの外側に、私たちにあい対するもの、対象物として犬小屋を作ります。ところが神は、あらゆる次元を超越されるご自分の中に、内側に、ご自分の存在の中に万物を創造されたのです。万物は神の中に存在を許されているに過ぎないのです。（使徒１７：２８）

すべてを超越しておられる大きな神に、外側の存在などありえません。燃え盛る太陽の中にも神はおられ（実際には燃えているのではありません）、太陽を内に宿しておられるのです。宇宙全体のあらゆる場所に神はおられ、宇宙全体をことごとくご自分の中に存在させておられるのです。したがってあらゆる物の中に神を認めるという感覚は、間違っていないのです。ただ、その理解と表現があまりにも稚拙な上に貧弱で、真実に到達していないだけです。その汎神論を笑ってきたキリスト教は、汎神論者と同じくらい愚かだということです。

また、汎神論と深く繋がっている精霊信仰、つまり妖怪だとか幽霊を恐れる信仰は、基本的に聖書が描き出している世界観と合致するのです。聖書の世界でも、天のみ使いが現れて神のみ心を告げたり、悪霊どもが災いをもたらしたりしています。キリストも悪霊を追い出し、日本語で幽霊、あるいは霊と翻訳されているものの存在にさえ言及しています。面白いことにキリストの弟子たちは、悪霊を恐れていませんでしたが、この幽霊あるいは霊は恐れています。ですから日本人の多くが理論的には否定しながら、感覚的には認めているこのような霊的存在は、聖書神学から充分に認められるものです。幸い、私たちペンテコステ信仰に属するものたちは、はじめからそのような存在を認め、悪霊の追い出しや病気の癒しなどを通してこれと戦ってきました。それがいま、いささか行き過ぎた傾向にあるのも、ご存知の通りです。

さらに聖書は、明らかに異次元の存在を認めています。少し挙げるだけで、今の世界、来るべき世界、死後の世界、天と呼ばれる次元、悪霊たちの次元などがあります。死後の世界も一つの次元ではなく、いくつもの次元に分かれているようです。正しい者が入れられるアブラハムの懐と呼ばれる幸いな次元、悪人が入れられるゲヘナと表現された裁きの

次元、さらに火の池と表現された次元、新天新地と呼ばれる次元、そしてそこに入ることを許されなかった者たちが入れられる、第二の死と呼ばれる次元などがあるようです。聖書はこれらのものについてほとんど説明を加えていませんが、垣間見ることが出来る世界です。そして神はこれらすべての次元を創造し、それらを超越しておられる方なのです。ですから日本人が霊界などと呼ぶ世界も、あながち迷信と言って切り捨てられないのです。人間は霊的な存在ですから、霊的世界のことをわずかながらにでも感じて、恐れているのです。それらを迷信と断言して切り捨てるのは、啓蒙思想に影響された西欧キリスト教の悪癖です。

とにかく、神という存在はあまりにも大きいのです。人間の理解力をはるかに超えているのです。その神について小さな頭の人間が説明し出すと、通俗的な汎神論的感覚や精霊信仰と混同してしまい、たちまちお笑い話の種になってしまうのです。その歪んだお笑いの神を笑うキリスト教も、聖書という啓示の本を持っていながら、非常に曖昧模糊とした神の理解しか持っていません。汎神論より、ほんの少し分かっているに過ぎません。

ためしに、三位一体を説明するときに持ち出される様態論を思い出してみましょう。まさに陳ぷんもので、汎神論のほうがよほど奥深く聖書の教えと調和するように感じます。[1] あるいは人間の自由意志と神の選びの問題を解決できない、カルビン主義の愚かさを思い出して見ましょう。聖書を持っていながら、神の絶対の自由意志を理解せずに、場所の上でも能力の上でも完全に制限されている人間の意志と、無限の神の自由な意思を同じレベル、同じ次元に置いて論じる誤りを、幾世紀もくり返しています。みな、無限の神の大きさを理解できずに、人間という手にとって見ることができるものから類推するという、つまり「・・・のような」と辿る手法を採るために起こる間違いです。神を人間のレベルに引きずり降ろして論じてしまうのです。

そういうわけで、日本人はあまり神についての説明を好みません。おおらかに、ぼんやりとした感覚で残しておきたいのです。そのほうが神聖さを傷つけず、本当に大きく高いお方の姿を大切に出来るからです。また非常に強い一神教的感覚があるために、あの宗教この宗教という「既成の宗教」を好みません。あるいは宗教団体の教えを好みません。それらの宗教が神を説明し出すと、たちまちばかばかしい神になってしまうからです。たとえ、困ったことが起こったりご利益が欲しくなったりして、それらの神々に祈願したとしても、大概の場合はそれらの表面に現れた神々ではなく、その背後におられる大きなお方、自分が心の底で本能的に感じてきたお方にお願いするのです。だから多くの日本人は無宗教であると自称しながら、信仰心は尊いものとして大切にし、信仰を持っている者を軽蔑したりはしないのです。

---

[1] 様態論＝三位一体を、たとえば水で説明するやり方です。水は液体と気体と固体として存在する。おなじように、神は父、子、み霊、として存在するというわけです。旧約時代は父、キリストの在世時代はキリスト、新約時代は聖霊などという説明もそれに属します。

なにごとのおわしますかは知らぬまま、かたじけなさに涙を流すのが、美しい日本人の心です。なにごとのおわしますかは知らないほうがいい、そっとしておくのがいいと感じているのです。なにごとかを知ろうとすると、くだらない神々や諸仏が出てきて、ぶち壊しになると恐れているのです。

４．　唯一の神

日本人の中にある、強い唯一神教の傾向についてもう少し考えて見ましょう。怪僧ともいうべき生涯を送った、一休禅師が詠った「分けのぼる麓の道はおおけれど、同じ高嶺の月をみるかな」という歌は、多くの日本人に親しまれています。もちろんこれは、互いに認め合う蓮如との交信の中で、たとえ自分たちは宗派の異なる仏教に属していても、同じ一つの真理に到達するのだと語ったものですが、一般の日本人はさらに枠を広げて、すべての宗教は結局一つなのだと考えるわけです。これは、宗教というものを知らない「宗教音痴」の日本人らしい発想ですが、少なくても、日本という土壌の中の宗教心としては、つまり、様々な異なったものを排除するのではなく、かえってそれらを取り入れて一つにしていく、和の文化の宗教心として非常に大切なものです。それはまた、あの神だ、この仏だと言い、あの神社だこの寺だと分け入っても、結局行き着くところは同じだという、極めて唯一神信仰に近い感覚に到達するのです。

日本人は直感的にあるいは本能的に、唯一神信仰に近い感覚を持っているのです。だから、神を偶像に代えることをせず、八百万の神々と言いながらそれらを礼拝することも滅多にせず、その目に見えない尊く気高いお方が潜んでおられると感じる、自然物を前にして頭を垂れるのです。その直感的本能的唯一神教の感覚こそ、伝道のための架け橋として大いに用いられるべきなのです。私たちは、日本人が大切にする「だれか分からない尊いお方」について語ればよいのです。そのお方こそ、天地を創造された神であり、万物を治めておられる神であり、神代の始まる前から日本にいてくださり、あらゆるよいもので日本を被い、日本人を祝福してくださっていた神であると語ればよいのです。

私たちは、外国からはるばるやってきたキリスト教という宗教の神について、はじめから語る必要はありません。昔から日本にいてくださったお方、昔から日本を豊かに祝福してくださっているお方、日本人が心で感じ、感謝し、信頼してきたお方について語ればいいのです。私たちの天地創造の神は、天地創造このかた、日本人には知られないまま、それと気付かれないまま、日本にいて日本を祝福していてくださった神です。ちょうどキリストが、ベツレヘムでお生まれになる前からこの世にいてくださったにもかかわらず、この世には知られていなかったのと同じなのです。

とは言え日本人は、感覚的にこの神を感じ取って、良く分からないまま恐れかしこみ、礼拝（らいはい）し、感謝の祭りを行ってきました。少なくてもそれは、アテネでパウロが伝道対象とした人々よりもまじめな意味で、知られない神を祀ってきたと思われます。良く分からないままですから、とうぜん、間違いも迷いもありました。でも、良くは分からないお方に涙を流して感謝する人の心は、尊いものだったのです。良く分からないで、間違った理解をもち、間違った礼拝を捧げてきたことを槍玉にあげるのではなく、よくわからないままにも、偶像を作らず、感謝を捧げ、礼拝をしてきた、素晴らしい面を取り上げて褒めて上げればよいのです。そして、良く分からないままでも、すべての神々と呼ばれるものの背後におられる大きなお方だと感じ、ありがたいと言って手を合わせているお方について、語ってあげればよいのです。

同じ日本人でも、神なんていないと嘯（うそぶ）く人たちよりは、なにごとのおわしますかはしらねどもと、手を合わせる人の方がよほど美しいのです。神なんていないと知者ぶっているときの日本人よりも、かたじけなさに心を揺さぶられ、涙をこぼしているときの日本人の方がずっとおくゆかしいのです。私たちはそういう日本人、そのようになったときの日本人を大切にして、天地創造の神について語るべきなのです。神棚に向かって拍手を打ち、お地蔵さんの前で頭を垂れ、祠で足を止め、社に目を閉じる日本人たちを、私たちは迷信深い人々とばかりに毛嫌いしがちです。でも信心深い人々とみて、その信心に語りかけるべきなのです。

私たちクリスチャンは、聖書という書物を通して、この日本人が感謝し続けて来たお方について、少しだけ多く知ることが出来ました。このお方の本当のお姿について、もう少しはっきりと学ぶことができました。このお方がどのような神かと知って、もうすこしはっきりとした礼拝をし、もう少しはっきりとした祈りをし、もう少しはっきりとした感謝の仕方をしています。もっといえば、このお方に信頼し、このお方の助けを体験し、このお方との交わりの素晴らしさを味わい、このお方こそ真の神であることを知っています。

私たちは、日本人が高貴で尊いお方を心に感じて礼拝するとき、その日本人を忌み嫌い、その礼拝を卑しみ蔑む必要はありません。彼らは乳飲み子が母親の乳房を求めるように、人間として当然のことをしているのです。神に似せて霊的な動物として造られた人間は、神を礼拝する本能を持っているからです。もしも日本人が誰をどのように礼拝していいのか知らないままで、ありがたい、かたじけないと感謝を捧げているのならば、親切に優しく失礼にならないように、少しだけ知っているに過ぎませんが、教えてあげれば良いことです。

５．　私たちの信仰

私たちの信仰は、西欧諸国で構築された神学を背骨にしています。その神学は、キリスト教以外の宗教をほとんど知らない人々によって、何世紀にもわたって積み重ねられたものです。ですから、基本的に異教というものを理解しない神学です。異教徒と共に住むということを前提としない神学です。あるいは異教徒に伝道しようとする意識のない神学です。[2]　私たちはいま、そのような神学の流れの中で信仰を持ち、そのような前提を持って聖書を読んでいるために、聖書を正しく理解できないのです。

神はイスラエルに対して、明快この上ないほど明らかにご自分を顕示してくださいました。そのイスラエルに与えられた律法を前提に、日本の文化や宗教が裁かれたのでは、私たちには立つ瀬がありません。日本人にはまだ、神がそれほど明快には顕示されていないからです。日本人はまだ、出エジプトの経験をしていないのです。十の奇跡も、雲の柱と火の柱も、二つに分かれた紅海も、苦い水が甘い水に変えられた不思議も、マナとウズラの体験もないのです。それなのに、イスラエルと同じ律法で裁かれてはならないのです。今の日本は、神を知らなかったアブラハムからモーセの時代の人々のように、まず、神について教えられなければなりません。律法で裁かれる前に、律法をお与えになった神が、正しく啓示されなければならないのです。

日本人は日本人らしいやり方で、自分たちの心に感じている尊く賢く気高いお方を礼拝します。私たちはそのすぐ隣で、私たちの方法でわたしたちの神を礼拝します。それでいいのです。その共通点から、本当の話し合いが生まれるからです。話し合いが生まれたら、神を紹介することも出来るのです。嵐の中でそれぞれの神々に助けを祈った異邦人たちの中で、ヨナは、「偶像礼拝者たちよ。悔い改めよ」と叫びはしませんでした。自分の神に対する信仰を貫いただけです。ローマに引きゆかれる途中、難破したパウロも同じでした。

私たちは日本人に神道という宗教からキリスト教という宗教に、あるいは仏教という宗教からキリスト教という宗教に、改宗させる必要はありません。天地をお造りになった神を信じてもらえれば、つまり、この神に信頼し、この神を崇め、この神に祈り、この神の教えに従ってもらえば、それでいいのです。アブラハムは改宗したから義とされたのではなく、天地を創造された神を信頼したから、義とされたのです。改宗して救われるのではなく、信じて救われるのです。日本人が心の奥深くで、良くわからないまま何となくおぼろげに感じてきたお方が、実は天と地をお造りになった神であると知ってもらえれば、あとはかなり円滑に話を進めることができるのです。日本人は広い意味で、すでにこの神に信頼して生きているのです。その信頼が、神に義と認められる信頼まで進み、高められれば良いのです。

---

[2] プロテスタントが異教徒の伝道について真剣に考え出したのは、ウイリアム・カーレーの出現以降ですから、高々２００年前のことです。

私たちは、仏教に敵対するキリスト教を、持ち込もうとしているのではありません。神道に対抗する、キリスト教勢力を定着させようとしているのでもありません。もちろん、仏教の中にも神は真理を啓示しておられるとか、神道の中にも神はご自分を現しくださったと言うつもりは毛頭ありません。仏教や神道の中にも救いがあるなどと、とんでもない主張をしようというのでもありません。ただ、救われていない人は完全に堕落していて、真理を理解することができないとか、救われていない人に聖霊はお働きにならないと主張する、過激な堕落説も採らないだけです。堕落した人間の中にも、最初に神に似せて造られたときの姿は、傷ついたとは言えまだ残っており、神を求める本能も完全には失われておらず、神についての知識もおぼろげながら留まっており、神について理解する能力も消滅していないのです。たとえ私たちが学んだ西欧神学がそのようなことを言っていても、それは聖書の教えにもわたしたちの経験にも反します。そして、私たちが福音を語り天地創造の神を紹介するとき、聖霊も共に働いてくださり、日本人が良く分からないまま拝んできた大きな方が、実は、天地をお造りになった真の神であることを、理解させてくださるのです。

神に似せて作られた人間には、本能として神を求め、神を礼拝する性質、欲求とも言うべきものを持っているのです。それが人間です。罪を犯して神を離れたところで様々な文化を作り上げてきた人間は、だんだんと神の姿が分からなくなって、様々な宗教を作り出しました。それでも人間の意識の中には、まだ神の姿がおぼろげに残っているのです。特に日本人は、かなり強い唯一神に対する感覚、あるいは意識があるのです。その意識の中にある神の姿をたぐり寄せ、聖書に啓示されている神のみ姿と同じ部分があったなら、それを積極的に認めて評価すべきです。共通点や類似点があったならば、それを手づるに正しい神の姿に導けば良いのです。

私たちには、自分たちの信仰を反省してみる必要があります。聖書を正しく読んでいるかどうかです。異教というものを知らない西欧神学の前提で聖書を読んでいないかどうかです。キリスト教信仰以外の信仰を、すべて偶像礼拝と断じて罪と糾弾するのも、人間の本能的な宗教心を否定するのも聖書の教えではありません。異教徒の中で生き異教徒に福音を語ることを教える神学が必要です。まず、そのような方向性をもって聖書を読み直すことが先決です。

６． 天地創造の神を紹介したパウロ

パウロはキリスト教史上もっとも傑出した神学者であると言われています。とは言え、パウロが神学論文を書いたことはいちどもありません。彼は当時の教会に起こっていた問題に対処し、必要性に応えて手紙を書いたにすぎません。それが非常に神学的洞察に満ちていたわけです。

パウロの福音理解

当時の教会にとってもっとも重要で緊急な課題は、クリスチャンたちが持っていたユダヤ主義といわれる考え方に関わるものでした。ユダヤ人たちは、神に選ばれた民族としての自分たちの優越性を信じ、異邦人たちが神の国に入るためには、まずユダヤ人にならなければならないと信じて疑わなかったのです。というより、神の国に入るとはユダヤ人になることだったのです。ユダヤ人が大多数を占めていた当時の教会が、神の救いをいただいて祝福の中に入るには、まずユダヤ人にならなければならないと考えたのは、ごく当然のことでした。彼らは、異邦人たちにユダヤ人になるための教育を施し、ユダヤ人になる決意の表明として、他のユダヤ人たちと同じく割礼という儀式を執行していたのです。（女性のためには洗礼などの儀式が行われましたが、一般的には、それらも割礼という言葉に含まれて語られていました。）

ところが啓示によって新たな福音の理解を与えられたパウロは、このユダヤ人たちの考え方に反対し、神の救いを受けるための割礼は不必要であると論じたのです。彼は、ユダヤ人の先祖アブラハムが信仰によって義と認められた出来事を根拠に、すべての人間は、アブラハムと同じように信仰によって義とされる、すなわち信仰によって救われ、神の国に受け入れられ、祝福を受けることが出来ると主張したのです。アブラハムが割礼を受けたのは義とされるためではなく、義とされた事実の証印として受けたのだ。彼は割礼を受ける前に、すでに義とされていたのだというのが論点でした。

パウロは、この教えをもって頑固なユダヤ人クリスチャンたちを論駁し、新たな信仰理解の指導者となり、キリスト教会の歴史の上で最も傑出した神学者と目されるようになったのです。異邦人への使徒という名をもらい、その名に恥じない働きをしようとしていたパウロには、この福音理解は非常に大切な、そして絶対に避けて通ることができないことでした。それが、神の救いの福音を狭いユダヤの民族主義から解放し、全人類的な、普遍的福音とすることになったのです。パウロが真に異邦人の使徒となったのは、異邦人の住む土地で宣教をしたことだけではなく、福音に新しい理解を持ち込んで、本当の意味で異邦人のための福音、普遍的な福音にしたことのよるのです。

パウロの神学の限界

パウロは、福音を名実共に普遍的なものにした立役者です。啓示の助けがあったとは言え、パウロの鋭さと、異邦人の土地で生まれ育ったユダヤ人として、パレスチナのユダヤ人とは異なった異邦人への理解、異邦人文化に対する洞察があったからこそ可能だったと言えます。とは言え、パウロの異邦文化の経験はまだ中途半端であり、異邦人伝道もまた、中途半端の域を出ないものでした。異邦の土地で生まれ育ったとは言え、彼は厳格なユダ

ヤ教徒であるパリサイ派のエリートになる教育を受けていたのです。また彼の異邦人伝道も、完全な異邦人伝道からは程遠いものでした。

パウロの実際伝道の多くは、ユダヤ人の会堂を巡るものでした。そこにいた異邦人はすでに割礼を受けてユダヤ人になっていた人々、あるいはユダヤの神に心を惹かれユダヤ教を心では受け入れていたけれども、まだ割礼を受けるまでには至っていなかった人々でした。ですからパウロの思考、文化的洞察、神学的論考の大部分は、そのような人々に関わるものに向かっていたのです。そういうわけで、かなりの数の無割礼の人々が加わってきたガラテヤの諸教会に、割礼の問題が浮上したときには、それについて論じなければなりませんでした。異邦人が大多数を占めていたと思われる、コリント教会には、異邦人特有の偶像礼拝や廃頽した性倫理について、書き送らなければなりませんでした。

ですからいま、パウロが対象とした人々よりももっと徹底した異邦人である、日本人を対象に伝道の働きをしている私たちは、パウロが語らなかった部分を考え、論じなかった部分を論じなければならないのです。またキリスト教文化の中で聖書が読まれ、その中で発展させられてきた西欧神学では、完全な異邦人社会に生きている日本人への伝道には足りない所だらけであるために、異邦人伝道に適した神学が必要なのです。しかもその神学の基盤は、聖書全般に及ぶ広い知識と正しい理解によらなければなりません。それはちょうど、三位一体と呼ばれ、キリスト教の教えの中で最も重要教理と言われるおしえが、聖書の中では深く論じられないままに終わり、後の時代の学びを待たなければならなかったのと同じです。もちろん、異邦人伝道のための神学を、いまここで深く論じるのはおおよそ無理なことです。ただ、「いいだしっぺ」ですから、少しだけは触れておかなければならないと思います。

神への信仰とキリストへの信仰

パウロはその神学的議論の中で、アブラハムが義とされた神への信仰と、クリスチャンたちが義とされるキリストへの信仰を、何の区別もつけずにまったく同等同質のものとして扱っています。それぞれの状況によって、神への信仰であったりキリストへの信仰であったりするのです。これは教えるパウロも聞くクリスチャンたちも、すでにユダヤ的な背景を持っていたからできることであって、日本のような完全な異教文化の中では、決して出来ないことです。キリストは神であり、神はキリストであるという感覚があって、つまり完全な三位一体の理解とまでは行かなくても、神とキリストは同質同列であるという感覚があって初めて可能なことだからです。

日本で神と言うと、日本人は、巷に散在している神々を思い出します。ごくまれには、自分が心の中で本能的に感じていた気高く尊いお方も、思い起こす人がいるかも知れません。でもキリストと言うと、「西欧の」宗教家、偉大な宗教指導者、キリスト教の創立者

程度にしか考えないのです。歴史上本当に存在したのかさえ疑う日本人も、少なくありません。神への信仰イコールキリストへの信仰という理解は、多くの異教世界では通用しないのです。もしもパウロが完全な異邦人宣教を試みていたならば、パウロの取り扱いは変わっていたことでしょう。

ちなみに、ルステラにおいて完全に異邦人に取り囲まれ、こともあろうに偶像礼拝の対象にされかかったとき、（使徒 14：８~18） パウロはキリストについて語らず、神について語っています。アテネのアレオパゴスで宗教的な異邦人に語ったときも、まず神について語っています。完全な異邦人の中で語り始めるとき、キリストから話し始めることは不可能であると、パウロは知っていたのです。そしてパウロが神について語り続けている間、アテネの異邦人たちは興味津々で聞いていました。ところが話がキリストの復活に及ぶと、彼らは突然興味を失い次々と立ち去ってしまいました。

多くの福音派の人々は、このときパウロが単純なキリストの福音を語らず、哲学的な話をしたために、伝道に失敗したのだと言いますが、それはまったくとんでもない、間違った見解です。完全な異邦人の土地でわずか一回きり説教しただけで、数人の決心者を出すことができたのは、むしろ大成功と言わねばなりません。日本での伝道のことを考えてみてください。このとき、人々が急に興味を失い嘲笑しながら立ち去ったのは、むしろパウロがあまりにも単刀直入にキリストを持ち出したためでした。このときのパウロは先を急いでいて、アテネに留まる計画ではなかったようです。そのために彼は、説教でも先を急いで、ゆっくり時間をかけて説明する余裕がなかったのでしょう。それが、彼の失敗といえば失敗です。

神を信じたアブラハムの信仰

パウロは問題にしていませんが、アブラハムの信仰はキリストに対する信仰ではなく、神への信仰でした。キリスト誕生の 2,000 年ほども前に生まれたアブラハムは、キリストについてはまったく知りませんでした。メシヤという言葉さえ知らなかったでしょう。キリストが十字架に付き、死に、甦り、罪の贖いの働きを完成されるなどということについては、一切知らなかったのです。それでも、アブラハムは神を信じて義とされました。ではアブラハムの義は、キリストの働きと関係なく与えられた義なのでしょうか。そうではありません。アブラハムの義も救いも祝福も、すべてキリストの働きの功績のゆえに与えられたものです。アブラハム本人はたとえキリストを知らなかったとしても、当然キリストの十字架と復活を前提として義とされたのです。

人が義とされるための条件は、すべて神が整えてくださいました。アブラハムの時代は、時間の上ではまだ整っていませんでしたが、永遠を現在とされる神にとって準備はすでに整っていたのです。キリストの十字架と復活について、アブラハムが知っていたかどうか

が問題ではなく、神がご存知だったということが大切なのです。アブラハムに必要だったのはこの神を信頼することだけでした。

そういうわけでパウロは、そのアブラハムの神に対する信仰と、パウロの時代の人々のキリストに対する信仰とを区別せず、同じものとして論じることができたのです。アブラハムが神を信じて義と認められた事実を取り上げ、それを彼の義認論の根拠としながら、主イエスを信じることによって義と認められると論じているのです。パウロの時代の人々はアブラハムを義としてくださった神の救いのご計画の中で、キリストを信じて義とされるのです。

キリスト教社会、キリスト教文化の中で形成されたプロテスタント神学では、「キリストが自分の罪の身代わりに十字架で死んでくださったと信じるならば、救われる」と言います。これがとんでもない間違いであることを、筆者はくり返して語ってきました。私たちはわたしたちの身代わりに死んでくださったキリストという「お方を信じて」、つまり、信頼して救われるのであり、キリストが死んでくださったという「事実を信じて救われるのではない」からです。しかし今ここに、もう一つ大きな問題があります。アブラハムはキリストを信じないで、神を信じて救われたという事実です。キリストのことは何も知らないまま、神を信頼して救われたのです。完全な異邦人である日本人は、神を信じるだけで救われるのでしょうか。キリストを信じなければ救われないのでしょうか。非キリスト教社会を知らない人々が発展させた神学は、異教文化に生きる人たちには役に立たない場合が多いのです。異教徒に対する宣教など、考えてもみたこともない人たちが構築した神学は、異教徒の中で宣教を試みる私たちには不充分なのです。

子どもが与えられると信じた信仰

割礼は救いの条件ではないと説いたパウロが、その神学の根拠としたアブラハムの信仰は、救いとか義とかいうものに関わるものではありませんでした。年老いてからでも子どもが与えられると信じた、いわば非常に現世的な信仰です。この、救いとは何の関わりもない、まったく的外れ、見当違いの信仰が、義と結びつき救いに繋がっているのです。このような性質、このような内容の信仰が、どうして義に結び付くのでしょう。

パウロは議論を発展させていませんが、ここに、救いを与えるために立てられたキリストの十字架への信仰、罪の赦しのために流されたキリストの血への信仰などとは、べつの神学があるのです。神はアブラハムがキリストの贖いを信じたから、アブラハムを義と認めてくださったのではないのです。ただアブラハムがご自分の言葉を信じ、ご自分を信頼したので彼を義とされたのです。たとえアブラハムがキリストについて知らなくても、神はキリストについてご存知であったために、アブラハムが抱いたご自分への信頼を、贖罪的に受け入れることが出来たのです。

ここに、裁判用語や法律用語の定義一辺倒で、神の贖いを説き、キリストの救いを説明する西欧神学の欠点が現れます。キリストの救いを贖罪論だけで終わらせるのは間違っています。罪の贖いのために捧げられた、完全な犠牲としてのキリストというのは、正しい神学です。でも、それだけで終わらせてはなりません。特に、犠牲だとか贖いという考え方にあまりなじみのない、農耕民族であった日本人の中で宣教する場合、贖罪論を前面に押し出した宣教に、意義と効果を期待することはできません。キリストご自身が、「神が求めておられるのは犠牲ではなく哀れみであると」いう、旧約聖書のお言葉を引用してお教えになったことがありますが、私たちもこのお言葉に教え直される必要があるのです。

もっと神の恵み、憐れみ、心の広さ、暖かさ、思いやり、慈しみなどを前面に押し出した宣教が賢くはないでしょうか。神は愛であるというお言葉を引用して、神がいかに愛にあふれた方であるかを説明しようとしても、贖いを前面に持ち出して話を始めると、四角四面で融通の利かない厳しい神、短気で怒ってばかりいる神のように受け取られてしまうのです。人間の弱さや欠点や短所に深い理解と同情をもって、寛容と忍耐を尽くして見守り、神から迷い出てしまった人間が神に立ち返り、ご自分の祝福の中にもっと豊かな人間らしい生き方が出来るように、願っておられる神が見えてこないのです。大多数の日本人が心の中で、本能的に感じている大きく、おおらかで、豊かにお方の姿と重ならないのです。

罪の悔い改めのない信仰

アブラハムは神を信じて義とされました。だれでもわかることですが、そこには罪の悔い改めはありませんでした。罪だとか悔い改めだとか、赦しなどという話は、まったく出てこないのです。果たして罪の理解と悔い改めのないところに、罪の赦しがあるのでしょうか。義とされるという言葉自体、罪を前提としている言葉です。神を信じたとき、アブラハムには罪の自覚があったのでしょうか。

私たちが教えられた神学では、悔い改めのないところに罪の赦しはありません。そして罪の自覚のないところに罪の悔い改めはありません。自覚があっても、罪に対する後悔と悲しみがないところに、悔い改めはありません。したがって私たちが伝道をするとき、なんとしてもまず、罪について話さなければなりません。罪とは何かと、苦労して説明しなければなりません。しばしば、神について語りキリストについて語るよりも先に、まず罪を自覚させるために、徹底的に罪について話します。そして悔い改めを迫ります。そのとき、罪の本質についてあまり理解していないクリスチャンたちは、やれタバコだとか酒だとかパチンコだとか、競輪だとか、競馬だとか、不倫だとか、表面に現れた悪い習慣や不道徳を責めることになります。ですから伝道される側としては、叱られ、たしなめられ、責められ、問い詰められ、告白させられ、まったく居心地の悪いときをすごさなければな

りません。ですから私たちが紹介しようとしている神は、どこでも私たちを見張っている怖い神、罪を容赦なく責め追い立てる怒りの神、人間の弱さや周囲の状況や物事のいきさつなどを全く考慮しない、心の狭い、寛容性のない神のように映ってしまうのです。このような神を受け入れるように語っても、なかなか受け入れられるものではありません。日本人の心の奥底にある、尊く気高くあくまでも慈愛豊かで、不完全な私たちを生かし育んでくださっているお方とは、あまりにもイメージがちがうからです。

一方、伝道する側にとって、罪について説明し、さらに悔い改めを勧めるのはあまりにも困難なために、ついつい、伝道する気持ちを失ってしまいます。尻込みしてしまい、お話しすることが出来ないで終わってしまうのです。せいぜい、教会に来るようにお勧めするが精一杯です。もしも伝道の手始めで、罪について話す必要がなく、悔い改めを迫る必要がないのなら、どれほど気楽に伝道が出来ることでしょう。

揺れ動く信仰

アブラハムは確かに神を信じました。でもその信仰は、お世辞にも立派と言えるものではありません。すぐに激しく揺れ動き、不信仰な妻サラの画策に乗ってしまいました。エジプト人の家政婦によって子どもを儲（もう）けて、とんでもない結末を迎えることになりました。その後、再び神がサラによって子を与えると約束してくださったとき、アブラハムは「百歳の者に子どもが生まれようか。九十歳の女が子どもを産むことができようか」と、笑って信じようとはしませんでした。さらに妻サラも、子どもが与えられると神の人から直接告げられたとき、「こんなに年をとっているのに」と笑います。アブラハムの信仰は、私たちの手本にはまったくなり得ない類のものだったのです。信仰の父というには、あまりにもふらつきおぼつかない信仰だったのです。

そんなアブラハムでしたが、彼は信仰によって義とされたときよりもずっと前から、神を信じていたのです。ハランにおいて神に声をかけられ、見知らぬ土地カナンへ向けて出発したのは、りっぱな信仰の行為でした。カナンは父テラが選んだ土地ではありましたが、改めて神がそれを与えると約束してくださった約束を、アブラハムは信じたのです。それから後も、彼は神を信じ続けました。それなのに、どうしてあの時になって、つまり、子どもが与えられると信じたときになって、義と認められなければならなかったのかまったく不思議です。果たしてアブラハムは、このときになって初めて、義と認められるにふさわしい信仰を持ったのでしょうか。それとも、それは長いアブラハムの生涯の歴史をはしょって、あのように記述されたという文学上の問題でしょうか。信仰とはある一瞬の出来事なのでしょうか。あるいは継続の積み重ねでしょうか。

神に義と認められる信仰とは一体どのような信仰か、私たちには判別不可能であり、パウロも語っていないのです。とにかく神は堅固な信仰を要求せず、信じたと思えないほど

のわずかの信仰さえも受け入れて下さったことは確かです。信仰の決心、入信、信仰告白、罪の告白などなど、目に見える信仰の表現を重んじる私たちの伝道方法が、間違っているとは思いません。入信に関わるパウロの神学には間違いはなく、それを根拠にした西欧型伝道方法にも間違いはありません。ところがそれでは割り切れない部分があるのです。それだけが正しいとは言い切れないところがあるのです。その神学は誤りではなく、伝道方法も間違ってはいないとしても、まだまだ未発達で不完全なものなのです。

おぼろげな神理解

知的な意味での知識、理性による知識という点では、アブラハムの神知識は現代の私たちよりもよほど低いものでした。私たちはいま聖書を所有し、山ほどの神学書を所有しています。ところがアブラハムの知識は、まだまだシュメール文化の中の信仰に負うところが多かったはずです。アブラハムが義とされたとき、はたしてどれほど確実に神について知っていたでしょうか。天地創造の神であり、唯一絶対の神であり、全知全能の神であり、不変普遍の神であるということを理解していたかどうかは、明らかではありません。彼を祝福した大祭司メルキゼデクは、少なくても天地創造の神であると知っていました。でもアブラハムの場合は不確実です。

ただ神ご自身が、折に触れて彼に現れ、語りかけてくださっていました。その体験が彼の主要な知識の源だったのです。まったくの異邦人である日本人を相手に宣教をする私たちにとって、いったい日本人は、どれだけの神知識を持たなければ救われないのか、大いに考えさせられます。また、真剣で真摯な礼拝態度を持っている現代の異邦人、異教の信仰しか知らない現代人に対して、神がアブラハムになさったように何らかの方法で語りかけ、導いてくださることはあり得ないことなのか、もっと真剣に論じられてしかるべきです。私たちが学んだ西欧型神学によるとそのようなことはありえないのですが、異邦人の中で宣教を進めてきた私たちは、聖書と体験からそのような神学には疑問を持つのです。パウロも、もしさぐり求めさることがあるなら、神を見いだすこともあると語っています。

神はアブラハムに対してご自分の側から現れてくださいました。現在の日本においても、神はクリスチャンという証人たちを通して、日本人たちにご自分を現そうとしておられます。クリスチャンがつたない話を通して神について語るとき、神ご自身が聖霊として働いてくださり、人の心に光をあたえ、語られた言葉を理解できるようにしてくださるのです。またその理解は理性で知るというものではなく、すとんと腑に落ちるというか、突然目が開かれるというか、感覚的に分かるというか、ある種の悟り、ふん切りのようなことが多いのです。信仰とは理性の問題ではなく、感覚の問題であり意思の問題だからです。

天地の創造者である神について語る

パウロの異邦人に関する神学は、まだまだ未発達のままに終わっています。でも先にも触れたように、まったくの異邦人集団の中に入れられたときのパウロは、異邦人に対する伝道方法を取っています。ルステラにおいてのパウロは、恵みをもって、天から雨を降らせ、実りの季節を与え、食物と喜びとで、人々の心を満たし、ご自分のことを証しておられた神について語りました。アテネにおいてのパウロは、この世界とその中にあるすべてのものをお造りになった、天地の主である神について語りました。そこに、パウロの異邦人の神学、異邦人の救いに関わる神学の芽生えがあります。

少なくてもパウロは、「ユダヤ人にはユダヤ人に、律法を持たない人には律法を持たない人のように、すべての人にはすべての者に」という原則で、宣教の働きに邁進していました。ただパウロは、異邦人の真っ只中で宣教を続けるという環境にはいなかったのです。そのために、その異邦人のための神学は未発達のまま終わったわけです。そして残念ながら、パウロの中でも未発達だったこの神学は、キリスト教文化の中で形成されたプロテスタント神学の中では、さらに忘れられた分野になってしまったのです。それが今、日本に生き、日本人に宣教しようとしている私たちは、大きな欠点というか短所となっているわけです。

異邦人の中で生きるクリスチャンのための神学、あるいは異教徒に福音を宣教するための神学は、聖書の中でも未発達の分野です。これは今、異邦人の中に生まれ、生き、信仰生活を続け、宣教の働きをしようとしている私たちには必須です。ですから、ちょうど三位一体の神学が聖書の中では表立って論じられていないにも関わらず、神学理論の発展の中では避けて通ることが出来なかった問題として厳しく論じられ、いまやキリスト教神学の中で重要な基本的命題となっているように、大いに論じられ、打ち立てられていかなければなりません。そうすることによって、教会全体がパウロのようにすべての人にすべての者となることが出来るのです。私たちはパウロが試みたように、異邦人の中では異邦人にふさわしい伝道の仕方を選ばなければならないのです。[3]

結論

日本人に天地創造の神を紹介するために、私たちは何をどうすれば良いのでしょうか。日本人の意識の中に潜んでいる慈愛深く、気高く、尊いお方のイメージを大切にして、そ

---

[3] 三位一体は立派な理論です。ただし、これが分からない、あるいはこれについては知らないという人がいてもかまわないのです。三位一体を正しく理解し、これを信じなければ救われないとしたら、救われる人は誰もいなくなるからです。筆者は天地創造の父なる神、十字架の救いの御業を完成された言葉なる神、そしてその救いを私たちに適応して、私たちの救いを完遂してくださる聖霊を、一人の神として信じています。しかし、ギリシヤの哲学的思考で考察され、構築された三位一体論は信じていません。無限の神を、一とか二とかいう人間の数字の概念で表現すること、また三と限定すること自体が傲慢だと思っています。

のイメージを手がかりに天地創造の神について語るのが、もっとも良いのではないかと思います。もちろん、日本人が本能的に感じ、大切にし、感謝を捧げ、心の中で手を合わせているお方のイメージは、天地創造の神の姿と完全に一致するわけではありません。しかし、一致するところが多いのです。その重なり合うイメージを強調し、重なり合わないところ、あるいは欠けているところはゆっくりと時間をかけて、優しく、親切に、押し付けや、嘲笑や、侮蔑にならないように、説明してあげたら良いわけです。

私たちは、基本的に異邦人に思いを馳せる必要がなかった西欧神学で、日本人の生活や信仰あるいは宣教を取り扱うには、無理があることを理解して、新たな聖書神学を構築する必要があることを知らなければなりません。そしてそれが出来る人は、異邦人の中で生まれ育ち、福音宣教に携わってきた人物であり、西欧神学や教団・教派の神学に縛られず、幅広く聖書を読むことが出来る人でなければいけません。そして、神学にも通じ解釈学などの学問にも通じていながら、それらの既成の西欧的学問に厳しい批評眼を持っている必要があります。

ただしそのような人物がそこここに転がっているわけもなく、新しい神学が猫の子のように生まれてくるわけでもありません。そこで必要なのは、一人ひとりの牧師・伝道者がそのような必要性を理解し、常に危機感をもって聖書を学び、危機感の中で生き働きをつづけることです。